



Title	国際宗教社会学会大会報告：サンティアゴ・デ・コンポステーラ2009
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	中外日報
Issue Date	2009-09-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/48043
Type	column (author version)
Note	中外日報2009年9月8日掲載
File Information	Chugai_Santiago.pdf



[Instructions for use](#)

櫻井義秀

1 サンティアゴ・デ・コンポステーラ

2009年7月27日から31日まで、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ市で開催された国際宗教社会学会大会に参加した。エルサレムで殉教した聖ヤコブの遺骸がガリシア地方に運ばれ埋葬されたという伝説が9世紀頃に生まれ、墳墓の上に聖ヤコブ教会が築かれた。教会を囲む旧市街は1985年、サンティアゴへの巡礼路が1993年に世界遺産に指定され、世界中から巡礼者と観光客を集めるようになった。ちなみに、2007年には巡礼路を100キロ歩いた約9万人、200キロを自転車で移動した約2万人、100キロを馬で旅した364人に巡礼証明書が交付された。巡礼路のスタンプ・ラリーは四国遍路にも通じる。

サンティアゴ（聖ヤコブ）・デ・コンポステーラ（墓場）の伝承は、ガリシア地方やスペインの中世史と関連がある。8世紀にイスラーム教徒であるウマイヤ朝がイベリア半島に侵入すると、カトリック教徒であった諸侯達と衝突、8世紀から15世紀末まで領地のぶんどり合戦が続いた。聖ヤコブは聖地奪回を掲げるキリスト教の象徴として崇拝されたのだ。

昨今、日本の観光客や自分探し世代もサンティアゴを目指すというが、遅ればせながら筆者もお仲間に入れてもらうことにした。といっても、マドリッドからサンティアゴ間を片道8時間（飛行機は1時間弱）の列車往復にただけで信仰心の欠如は否めない。マドリッドからサンティアゴに近づくにつれて、岩山とオリーブ畑の乾ききった大地に緑が濃くなり、サンティアゴや大西洋岸のアルコーニャ付近では日中も気温が25度程度の極めて過ごしやすい気候となる。海鮮料理とビール・ワインで夢のような数日間を過ごしてきたが、紀行文ではないのでそろそろ学術的な話に展開していこう。

サンティアゴ・デ・コンポステーラ市は人口9万人の町だが、ここに同名の大学がある。16学部と4つの職業学校で学生数3万人を有するスペイン有数の大学という。この政治・社会学部の校舎を使って国際宗教社会学会が開催され、欧米圏から200名近くの研究者が集まった。日本からは7名の参加だった。

2 宗教多元主義と宗教政策のあいだ

この度の共通議題は「宗教多元主義の挑戦」という刺激的なものだった。宗教多元主義というのは、多種多様な宗教が覇を競うのではなくお互いの価値を認めて共存していこうという宗教哲学や世俗化社会における政治理念である。ジョン・ヒックの多元主義神学では、世界の諸宗教は究極的実在に対する特殊文化的応答として哲学的に解釈可能であり、そう考えることで複数宗教が共存する文化・社会的環境を形成する足がかりになるという。

それに対して、宗教間対話を実践する現在の宗教者達は、個々の宗教伝統を超越する特権的次元や実在を設けることなく、直接的な対話の積み重ねによってお互いの宗教に敬意を払い、それぞれの宗教的価値を確認しあっているようである。

宗教社会学でいうところの宗教多元主義とは、宗教の多元化が進んでいるという現実認識 (religious plurality/diversity) を元に、諸宗教には対等な価値と信仰者の対等な市民権が認められるべきだという政治的理念 (religious pluralism) を付加したものである。

実際、スペインの宗教多元状況として紹介されたのは、カトリックという主流文化に付加される外来宗教の多様さであり、街の様々な教会群である。外来宗教の隆盛は、ニューカマーの移民の他に、フランコ独裁体制と結びついたカトリックに対して距離感を抱くスペイン人の心にニッチを見いだした外来宗教の宣教戦略からも説明可能だろう。開会セッションにおいて、スペインの宗教的マイノリティが顕在化・拡大化していると報告された。

外来宗教	宗教人口
ムスリム	120 万人
プロテスタント福音派	120 万人
ギリシャ正教	10～20 万人
ユダヤ教	4～6 万人
エホバの証人	11 万人
モルモン教	3 万人
ヒンドゥー教	2.5 万人
オルターナティブ	10 万人

(出典 Francisco Diez de Velasco, 'The Visibilization of Religious Minorities in Spain,' paper on the 30th conference at SISR, in Spain)

ところで、宗教多元主義を内包している伝統宗教は、シンクレティズムを除いてないと言って差し支えない。歴史宗教は排他的信仰を信徒に要求してきたし、信仰者の宗教意識としては、この神様やこの指導者でなくてはならないのだ。むしろ、日本人やブラジル人の宗教的感性からすれば、必要に応じて複数の神様詣でをしてどこが悪いのかということにもなるが、宗教伝統が混じり合い、平和的に住み分ける状況は簡単に出現しない。

むしろ、マイノリティ宗教もそうだが、他宗教の信徒を自宗教に改宗させての教勢拡大に努める教団もあり、ホスト国の主流派宗教と葛藤を引き起こす。実際、安定的な宗教文化が揺るがされるような事態に直面すると、ふだん自らの宗教文化を意識していなかった人達までも民族、宗教文化の差異に敏感になる。これが諸宗教間に緊張がはしる宗教多元状況であり、移民人口の増大によって大きな社会変化を被るヨーロッパの問題である。

基調講演を行った中国人でパデュー大学教授のヤンフェンガンによると、世界各国の宗教政策を調べた結果、特定の宗教文化に宗教市場の独占/寡占を認める政策の方が多元主義政策よりも多い。こうした状況を見ると宗教多元主義を唱えることと、宗教多元主義を実現するための法的整備や社会意識を変えることとの間には相当の距離があることが分かる。

宗教政策		国家の数	比率
多元主義	全ての宗教が等価に扱われる	40	20.4
寡占主義	歴史文化的伝統として宗教を扱う	16	8.2
	複数の特定宗教に対する国家の庇護的政策がある	56	28.6
	一つの特定宗教に対する国家の庇護的政策がある	41	20.9
独占主義	一つの国家宗教・公定宗教がある	43	21.9
完全禁止	宗教活動は禁止である。	(2)	
計		196	100.0

出典 Fenggang Yang, 'Oligopoly Dynamics: Consequences of Religious Regulation,' paper on the 30th conference at SISR, in Spain

グローバル化によって外来宗教とホスト国の宗教文化が葛藤する局面が増えてきており、カルト問題もその一つの表れである。宗教多元化とわれわれはどう向き合うのか。今後、宗教社会学には宗教多元化と宗教政策の実態を詳しく調査し、そうした現実認識に基づいて宗教間対話や様々な宗教信仰者の市民権の確保といった問題を現実的に考察していくことが求められる。

さて、聖ヤコブは筆者のような観光者にも研究課題を与えてくださった。宗教多元主義の時代だからこそ、これを恵沢と解釈しても問題なからう。